

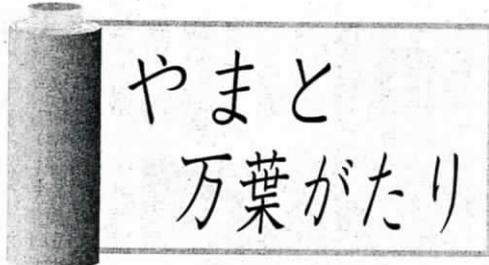
この花の 一枝のうちに

百種の 言ぞ隠れる おほろかにすな

新年度を迎えましたが、新型コロナウイルスの影響で世界的に不安な空気に満ちているように思います。当館も閉館が続く、お客様も閉館が続く、お客様のいない館内を寂しく思う毎日です。そのよみ、明日香村も花々で彩られてきました。今回は、春を代表する花、桜をめぐる男女の贈答歌を紹介いたします。

この歌は、藤原広嗣

がある娘子に桜の花を贈った時の歌です。広嗣は藤原宇合の子で、不比等の孫にあたる人物です。女性に歌を添えて花を贈るなど、なかなか気の利いた男性です。広嗣は、この桜の花の枝にはたくさん言葉が隠れているので、粗末に扱ってはいけないよ、といいます。隠れているという「百種の言」とは、もちろん娘子に対する愛の言



葉です。なんてキザな歌だ！ と思いましたが、娘子の答えた歌はこれまた痛快です。

娘子は、「この花の一枝のうちは百種の言持ちかねて折らえけらずや」、この花の枝はたくさん言葉を抱えきれなくて、折れてしまったのではないですか、と返します。「折らえけらずや」は、折

藤原広嗣(巻八・一四五六)

れたことを相手に確認したことを重苦しくするニュアンスのある表現です。届いた時にすでに枝が折れていたことにちなんだのか、娘子がそのように装っているのかは不明です。いずれにしても、桜にこめた広嗣の「百種の言」は、この娘子に勝ちな女性であるよ

にはかえって重苦しかったのでしよう。娘子は、広嗣の熱烈な愛情を、彼の歌を利用して上手にはぐらかしています。このような切り返しの妙を心得ているこの娘子は、ちょっとこの娘子は、ちょっと(県立万葉文化館主任 研究員・大谷歩)

に思われます。この歌を受け取った広嗣は、がっかりして落ち込んだのか、男心をくすぐられてますます娘子に夢中になったのか、想像はふくらみます。万葉びとたちの春の恋模様もさまざまだったことでしょう。お花見も控えた方がよさそうな今年は、「万葉集」の花の歌で春を満喫したいと思えます。

次回は15日

【訳】この花の一枝の中には数えきれぬほどのことばがこもっている。いい加減に思うな。

世間も 常にしあらねば

屋戸にある 桜の花の 散れる頃かも

久米女郎(巻八・一四五九)

ソメイヨシノのそばを通った時に、花吹雪のように春風に花びらが舞う様子を幾度か目にする、もう桜の季節も終わりのだと実感します。万葉びとたちが見ていた桜はヤマザクラだと言われていますが、彼らは桜の花が咲くことと同じくらい、散ることに苦心を寄せていました。今回の歌は、厚見王が久米女郎に贈った歌への返歌です。厚見王は「屋戸にある桜の花は今もかも松風疾み地に散るらむ」、あなたの家の桜の花は、今ごろ松風が激しくて地に散っているのでしょうか、と詠んでいます。一見すると桜を話題とした女郎へのご機嫌伺いの歌ですが、桜が強い松風で散ること、何らかの寓意があるとみる説もあります。

久米女郎は厚見王からの問いに、世間は常無きものである、桜の花も散っている頃でしょう、と返答します。桜の花の移ろいに寄せて自らの心変わりや暗に示したか、あるいは厚見王の心変わりを非難しているとも推

やまと
万葉がたり

測されます。この贈答歌は、二人にだけ共有されている裏の意味があるように思われてなりません。

また、「世間も常にしあらねば」の表現からは、仏教の世間無常の思想を読み取ることができます。「万葉集」の歌々をみると、古代日本で最も理解された仏教思想は世間無常であったと感じます。女郎

また、「世間も常にしあらねば」の表現からは、仏教の世間無常の思想を読み取ることができます。「万葉集」の歌々をみると、古代日本で最も理解された仏教思想は世間無常であったと感じます。女郎

【訳】世間も移ろうものですから、家の桜の花とて散っている頃でしょうよ。